

## 瓦当文様デザインの分類からみる近代石州瓦の流通圏について (成果要旨)

氏名 阿部志朗 ※1

**概要** 近世末から近代にかけて生産された石州瓦について、軒棧瓦の瓦当文様の違いに注目し、生産地における文様と製造窯との照合、消費地における石州赤瓦の現存確認を行った。生産地調査では島根県大田市、江津市、浜田市、益田市で確認した多数の瓦当文様のうち、幾つかの文様と窯の照合ができた。消費地調査では北海道、秋田県、山形県、新潟県などで近代の石州赤瓦が確認でき、いくつかは島根県石見地方の産地の特定ができた。また、従前の訪問で現存を確認していた韓国・鬱陵島の石州瓦の産地特定ができた。調査の過程で島根県内の生産地および国内外の消費地では、ともに石州赤瓦の屋根の解体や瓦の葺き替えにより伝統的な瓦景観に著しい変化が及んでいることが分かった。

### 研究背景と目的

近世末から近代にかけて島根県西部石見地方で生産された石州瓦は、いわゆる「北前船」と呼ばれていた日本海の物流システムの重要な商品の一つとして、北は、北陸・東北・北海道、南は九州北部、四国西部、また韓国鬱陵島などの沿岸部に広く流通している。従前の現地調査では

- ・ 登り窯特有の釉薬の色むらがあること
- ・ 裏面に施釉がないこと、
- ・ 軒棧瓦の瓦当文様デザインが現在の石州瓦の瓦当文様と異なること

という点のみに注目し、近代石州瓦の現存を把握するにとどまっている(阿部 2019)。

石見地方の沿岸部で生産される石州瓦は 1,250℃を超える高温で焼き締まる都野津層と呼ばれる粘土を成形し、これまた 1,250℃以上の高温で褐色に発色する出雲地方の凝灰質砂岩の来待石の粉を釉薬として作られる赤瓦である。高温焼成による堅牢な瓦は耐寒性、耐酸性に優れ日本海沿岸

や、九州、四国の寒冷地にも販路を広げた。最盛期には東は大田市から西は益田市にかけて 130 を超える登り窯が存在し、それぞれの窯(工場)は窯ごとに独自の瓦当文様を施したが、多くの窯は戦後廃業し、また JIS 規格への適合のため瓦当文様が統一されたりしたことで、各地に残る様々な瓦当文様がどの窯のものか、考古学的な手法の近世・近代遺跡の発掘調査の他には明確に述べられたものはほとんどない。

以上のことから、本研究は窯ごとに異なる瓦当文様デザインの近代石州瓦について、生産地で瓦当文様と製造窯との照合を進めるとともに、それぞれの瓦の流通圏とその建築物の現状を明らかにすることを目的とする。このことは単なる瓦の分布調査に収まらず、瓦当文様で生産地と消費地とが繋がることを明確にするものであり、近世～近代の物流が各地の景観(瓦屋根の色)に与えた影響などを捉えることなどにも通じ、多面的な意義があるものと考えている。

※1 島根県立浜田高等学校 非常勤講師

## 【様式 2】

### 研究成果と考察

#### ○生産地調査

石州瓦産地である島根県大田市、江津市、浜田市、益田市で、かつて近隣に瓦窯（瓦工場）があった主要集落で軒棧瓦の瓦当文様の収集を行った。

数十種類の瓦当文様が収集できた（図1～4）が、多くの文様は収集した集落（大字単位）とその周辺にのみ分布し、他集落にまたがることは少なく、極めて地域的偏在性が高い。集落縁辺の斜面にあった瓦窯がその集落向けの瓦生産で収益が得られていたことが考えられる。

石州瓦の瓦当文様は従来の考古学的な先行研究の古代～中世の寺院の瓦で報告されているような文様と類似するようなデザインは少ない。「外区」と呼ばれる縁の部分の模様はなく、もっぱら内側の「内区」の部分のみ。全体的に簡略化されたデザインが多い。文様の多くは左右対称のデザインで、中心から左右上部に向かってカズラやツタの葉が伸びる「唐草文」に分類される瓦が多い。

文様の中心には桐や蓮などの植物由来の模様や幾何学的な模様のような伝統的なものがあるが、石州瓦の近代の瓦当文様で興味深いのは、とくに江津市域で生産された瓦には文様の中心（中心飾）の部分にひらがな、カタカナ、漢字（サ、ト、大など）を伴う各窯の窯印（商標）があらわれていることが多い点である。集落ごとに特定の窯印の文様の瓦の家屋が多数集中するので、家主の特注品ではなく、近隣の窯で大量に生産されたことが分かる。また浜田市では火焰あるいは水しぶきが飛び散るようなデザインの瓦が多く見られるなど、地域によって特色が際立っている。

なお、戦後、JIS規格に合わせるために石州瓦工業協同組合で統一され、現在で



図1 大田市温泉津地区の瓦当文様の例



図2 大田市大森地区の瓦当文様の例

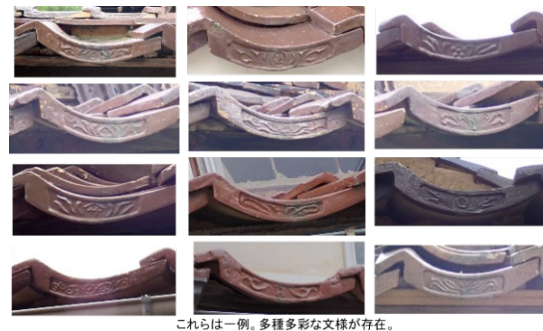


図3 江津市都野津地区の瓦当文様の例



図4 浜田市中心部の瓦当文様の例



図5 昭和30年代以降の統一文様

【様式 2】

も引き継がれている瓦当文様は、中心が単なる●印である(図5)。

生産地の瓦の中で、文献と現地調査により瓦当文様と窯が照合(または推定)できた瓦の例は次の通り。

A 温泉津(大田市)・中島瓦工場

創業時期: 1873(M6)~1926(T15)頃



鳥取県智頭町の旧家「石谷家住宅」に同じ瓦当文様の黒い石州瓦(鉄砂瓦)があり、大正8年に温泉津の中津屋本店(中島瓦工場(中島宗吾))からの購入記録がある(宮澤(2001)より)。

B 都野津(江津市)・坂根瓦製造場

創業時期: 1902(M35)~1941(S16)



C 都野津・川上窯(川上本店)

創業時期: 1879(M12)~1934(S9)



D 都野津・川崎屋窯(川下藤市)

創業時期: 1907(M40)~1941(S16)



E 都野津・唐鐘屋窯(佐々木類造)

創業時期: 1907(M40)~1916(T5)頃

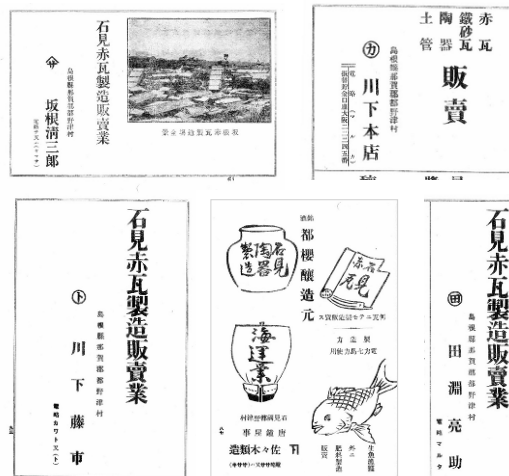


F 都野津・油屋窯(田淵亮介)

創業時期: 明治初年~1931(S6)



上記 B~F は『那賀郡誌』(1916)の巻末広告の窯印(下図)から推定。



G 浜田・森脇窯(栢山瓦窯)

創業時期: 天保年間~不明(戦前頃)



銅版画集『石見国商工便覧』(1894(M27))の森脇窯(左下)の跡地に現存する土留め(右下)のノ瓦。



(※A~Gの創業時期は

島根県古代文化センター他(2016)などより)

これらの他には窯(工場)と文様の照合は進まなかった。最盛期には石見地方には100を超える瓦・焼物の窯があったが、多くは戦前までに閉業したため資料が乏しい。瓦葺き専門の施工業者の方々への聞き取りでも、多くは戦前の瓦なので詳細を知る方はほとんどいなかった。困難を極めるが照合は今後も続けたい。

【様式 2】

○消費地調査

本研究では次の地域で、石州瓦の分布について消費地調査を行った。

- | 調査地域（調査順） |         |
|-----------|---------|
| ① 隠岐諸島    | ② 佐渡島   |
| ③ 加賀地域    | ④ 丹後地域  |
| ⑤ 播摩地域    | ⑥ 西九州地域 |
| ⑦ 韓国・群山   | ⑧ 道南地域  |
| ⑨ 南予地域    | ⑩ 韓国・釜山 |
| ⑪ 西東北地域   |         |

今回の調査に加え従前の予察的調査も合わせ、先述の瓦当文様の石州瓦が現存する主な場所をまとめると以下ようになる。

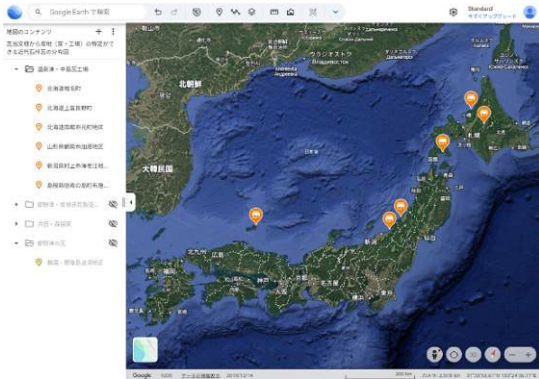


図6 温泉津・中島瓦工場の瓦(A)の現存地域  
※図中のポイントは、北海道増毛町，北海道上富良野町，北海道函館市，山形県鶴岡市，新潟県村上市，島根県隠岐の島町（複数箇所）

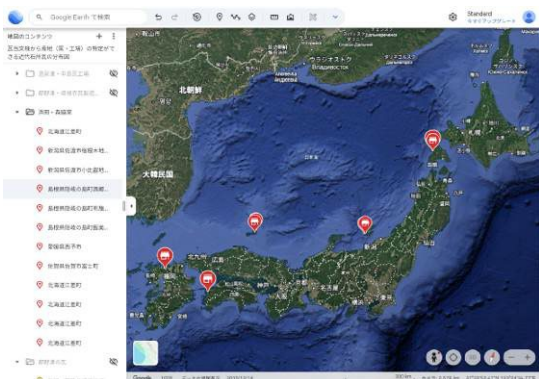


図7 浜田・森脇窯の瓦(G)の現存地域  
※図中のポイントは、北海道江差町（複数箇所），新潟県佐渡市（複数箇所），島根県隠岐の島町（複数箇所），愛媛県西予市，佐賀県佐賀市

以上の分布を見ると、近世末から近代中頃にかけて往来していた北前船の石見地方の寄港地であったA 温泉津, G 浜田の瓦は北海道を初めとして遠隔の消費地に広がっている。これらは明治から大正初期に建てられた建物（特に蔵や寺社）が多い。石見地方の鉄道敷設は大正 10 年代に下るので、それ以前に海路で運ばれた瓦と判断できる。

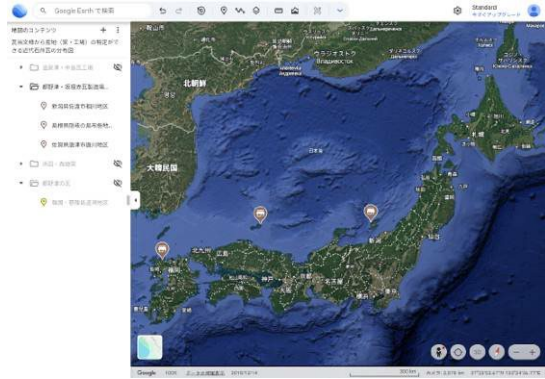


図8 都野津・坂根瓦製造場の瓦(C)の現存地域  
※図中のポイントは、新潟県佐渡市，島根県隠岐の島町（複数箇所），佐賀県唐津市

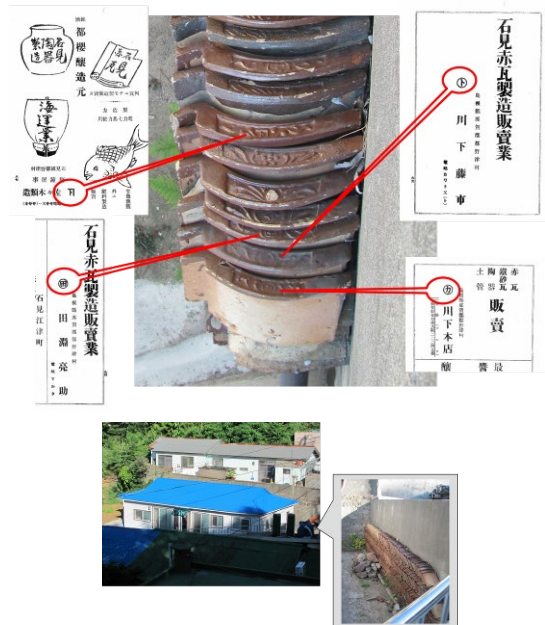


図9 韓国・鬱陵島にまとまってあった都野津の瓦(C~F)（2010年調査時）  
※2010年調査時には「江津産瓦」としか判断できなかったもの。本調査で瓦の工場が判明。

## 【様式 2】

図 8 の流通範囲に見られるように、都野津（江津）の瓦は温泉津、浜田に比べて範囲は狭いが、図 9 のように韓国・鬱陵島にも及ぶ。鬱陵島は 1910 年の日韓併合後、江津や浜田と漁業での行き来があった場所なので、行きの空の漁船に積み込んで行った可能性が推察できる。また、鬱陵島まで及ぶなら韓国本土はどうかと考え、日本人街があった地域を調査したが、本研究の範囲では石州瓦の発見には至らなかった。

### ○今後の課題

近代石州瓦の生産地での瓦当文様と窯（工場）の特定と、遠隔の消費地に現存する瓦の照合には一定の成果はあったが、未判明の瓦当文様は多く、今後課題が残る。

最後に、調査研究の過程で近代の石州瓦（石州古瓦）が消費地で建物の解体や他の瓦への葺き替えにより伝統的な景観が変容していることに危機感を感じた。図 10 は北海道江差町の現在の瓦屋根の分布であるが、すでに近代の石州古瓦や同じく近代に持ち込まれた北陸系の瓦が、新しい石州瓦や他産地の新しい瓦に吹き替えられている場所

が多く見られた。これは生産地の石見地方も同様で、世界遺産石見銀山の中心地大森地区などでも瓦吹き替えによる景観の変容が進行している。守るべき伝統的な景観とは、については改めて考えていきたい。

### 参考文献

- 阿部志朗「近世～近代に生産された石見地方の窯業製品の分布から見た日本海海運」歴史地理学 61-1, 2019, 36-51 頁。  
島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター『在地陶磁器修正 1（石見部 陶器編）』島根県教育委員会, 2019。  
那賀郡共進会展覧会協賛会『那賀郡誌』那賀郡共進会展覧会協賛会, 1916。  
中谷与助『石見国商工便覧』川崎利吉, 1894。  
浜田市商工水産課『浜田の窯業』浜田市商工水産課, 1953。  
宮澤智士『近代和風建築 智頭の石谷邸』智書房, 2001。  
森郁夫『ものと人間の文化史 100・瓦』法政大学出版局, 2001。

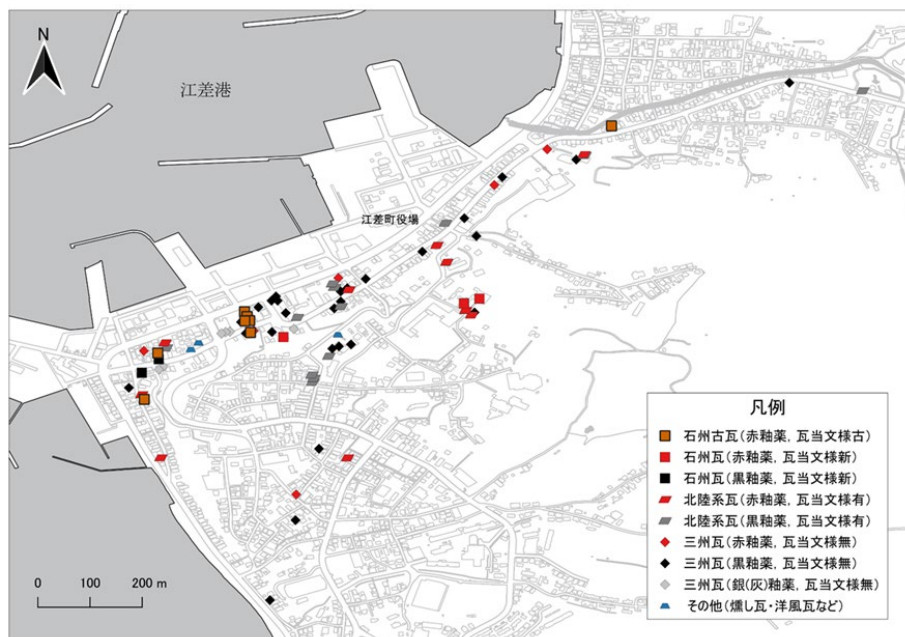


図 10 北海道江差町中心部の瓦屋根の分布(阿部作図)